

【聞き取り票】

ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）  
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じての命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]

記入年月日	2015年 6月 16日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	大岩 孝平 (おおいわこうへい)	性別	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 男    2. 女
生年月日	明・大・ <input type="text" value="昭"/> 7年 月 日 (被爆時年齢 13歳)		
現住所	〒 電話 FAX		
被爆地	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 広島    2. 長崎 [町名 段原中町    距離 2.0 km]		
手帳区分	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 直爆    2. 入市    3. 救護    4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種]    6. 被爆者の子・孫    7. その他		
氏名の公表の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 可    2. 不可		

1. 被爆したときのことをお聞かせください。

被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。

2. その後の人生についてお聞かせください。

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

私が昭和20年8月6日に広島で被爆したその時の体験、その後の状況を一通りお話させていただいて、そのあとご質問いただきながら、中身を掘り下げていければと思います。

(▼① ノーマア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会提供)



①はご存知の広島原爆ドームです。お手元に地図がございましたけれど、この地図の爆心のところに産業奨励館というのがあります。地図の真ん中に相生橋がありますが、そのすぐ下のところです。この産業奨励館が今の原爆ドームです。戦前としては立派な建物でした。そのすぐそばにあった島病院の上が爆心地になります。

(▼②米軍撮影 広島平和記念資料館提供 HG273)

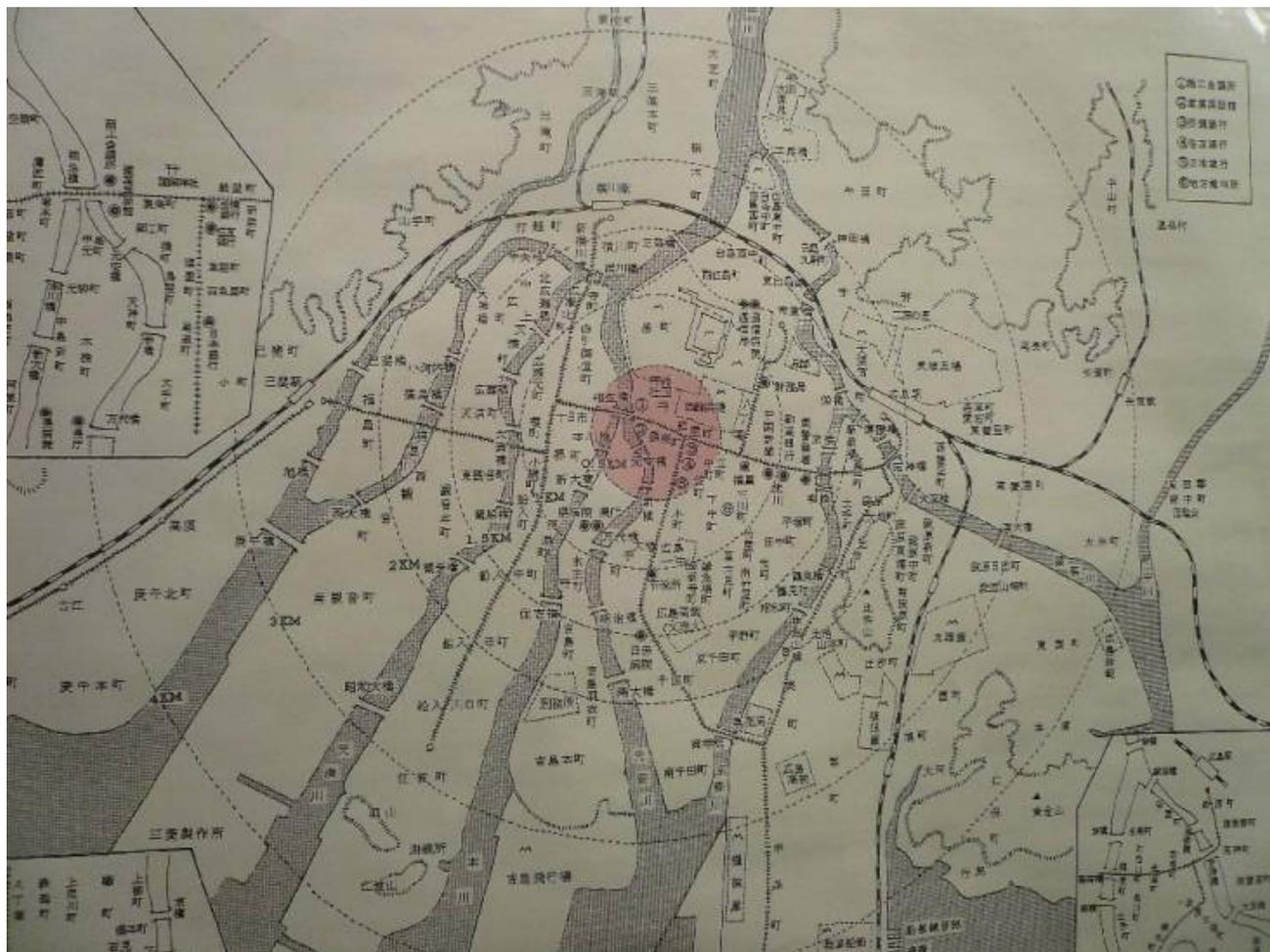


②は原爆が落とされた時のきのこ雲と言われております。ただ、私はこのきのこ雲というのは見ておりません。真下にいましたので、どんな形をしていたのかは全く見えませんでした。

(次のページの) 地図で言いますと産業奨励館のちょっと右、八丁堀の丁という字の辺りが私の小学校のあったところです。

当時、広島には済美学校という広島と東京と二つしかない偕行社の附属の学校がありました。偕行社というのは陸軍の将校の倶楽部で、私はその済美学校に幼稚園、小学校と通いました。済美学校では、一般の小学校と同じ授業をやりながら将来軍人になるための基礎を叩き込まれる。物心つくかつかないころから根っからの軍国少年で育ったわけです。この学校は終戦と同時になくなりました。校舎は原爆できれい

になりましたけれども、学校そのものも借行社の附属でしたから、陸軍が解体しましたから当然廃校になり、私が最後の卒業生ということになります。



昭和20年の8月6日午前8時15分、広島に原爆が投下されました。その時私は13歳、旧制中学1年生でした。旧制中学1年生というのは今の新制中学の1年生と歳は同じですが、昔は旧制中学の上に旧制高等学校というのがありまして、その上に大学があるという仕組みで今とは学制が違ってきます。

旧制中学に入ったのは昭和20年の4月ですから、原爆が落とされた時は、まだ中学生になったばかりでした。8月6日、私は段原中町というところにあった自宅で被爆をいたしました。

この地図の右の方に広島駅から宇品駅の方へ下りて来る線路があります。この線路は今はなくなりましたが宇品線という、宇品の軍港に人や物資を運ぶためのものでした。宇品線が猿猴川を渡ってすぐのところにあった駅が南段原という駅で、その左側に段原中町があります。この、町という字のある辺りが私の自宅のあったところです。その左側に比治山という山がございまして、これは高さが90mくらいの低い丘のような山で、上が公園になっていました。私の自宅はその東側にありました。

8時15分に原爆が投下されて物凄い光が射しました。普通の爆弾は地面に落ちて爆発しますが、原爆は地上から600mくらいのところで爆発しました。東京スカイツリーは634m、広島で原爆が炸裂したのが580m、長崎が503mですから、スカイツリーのアンテナの塔の辺りで原爆が炸裂したとイメージしていただければわかりやすいと思います。

井上ひさしさんの『父と暮らせば』に「あの日、あの朝、広島の上空580mのところで原子爆弾ちゅうものが爆発しよったのは知っちゃろうが。1秒間で摂氏1万2千度になる原爆が爆発した。太陽が二つ出来たようなもんじゃ・・・」とあります。太陽の表面温度が6千℃ということですから、その倍くらいあります。それが広島の上空580mのところに現れました。

私は小学校で話をする時には、「自分たちの頭の上に急に太陽が二つできた。この時の爆心の真下の地面の温度は1500～2000℃くらいと言われています。地上600mくらいのところに太陽がもう一つ現れた」と話しています。

(▼③竹内勇氏提供)



8時15分というのはちょうど食事が終わって、本来なら私も学校に行っていました。当時、中学の2年生以上は周辺の軍需工場などに連れて行かれて作業をしていましたが、私たち中学1年生と女学校の1年生は、まだ子どもですから工場には行かず、建物疎開作業をやらされていました。

建物疎開作業というのは軍用道路という意味もあったでしょうが、焼夷弾が落ちて焼けて来た時に類焼を防ぐために幅

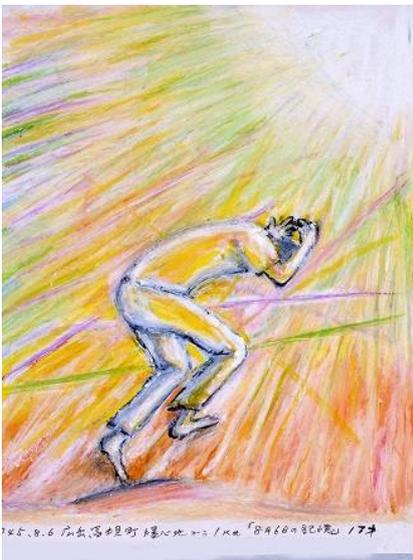
の広い道路をつくる。そのために邪魔になる建物を全部壊したんです。邪魔になる家に住んでいる人に「あんたの家は邪魔だから壊すので立ち退いてくれ」と強制的に立ち退いてもらって、たぶん家の柱の下の方は大人がのこぎりで切ったり、斧で切ったりしていたんでしょうが、屋根にロープを引っ掛けて子どもがワッショイ、ワッショイと引き倒す。そして倒れた家の廃材を片付ける。その作業を12、13歳の子どもがやっていたんです。

私も本来ならばその作業に行っていたはずでした。作業していた場所は爆心地のすぐ近く。爆心地が広島の中心街ですから、その辺に大きな道路をつくらうということで建物疎開作業をやっておりました。それで爆心地周辺に広島の中学校、女学校の1年生は集まっていました。ですから広島の中学校、女学校の1年生は原爆でほとんどが亡くなりました。広島に市立女学校というのがありました。市女と言っていますけれど、ここは2年生も建物疎開に従事していたので650人くらい亡くなりました。他の学校も300～350人くらいが亡くなっています。何とか家まで辿り着いた人も中にはいますけれど、ほとんどの人が行方不明で亡くなって

いるという状況です。私は国泰寺町にあった旧制中学の1年生でしたので、学校にいても助からなかったし、疎開作業に出ていれば爆心地でまともにやられて、行方不明も他人事ではない状況でした。

私がなぜ家にいたのかということですが、たまたま親父が前の日から山陰に出張してしまっていて家にいなかった。当日お腹の調子が悪くて、母親に「今日は腹の具合が悪いんだ」と言ったら、私は姉が二人いてちょっと年の離れた末っ子の男の子でしたから母親が私に非常に甘くて、「今日はものすごく暑いし学校に行っても勉強をするわけじゃないから一日休みなさい」と言った。その一言が私の生死を分けた。中には調子が悪くて休みたいと言ったら、「何を言っているんだ。お父さんは戦地で働いているぞ。お兄さんは軍需工場で働いているぞ」と言われて学校に行っただけに亡くなったという子もいます。私はお袋が休みなさいと言ってくれたお陰でこうやって生き延びたということです。

(▼④石谷龍司氏作 富士見町の自宅 広島平和記念資料館所蔵 NG126-01)



8時15分はどのような状況だったかと言いますと、家が東南の角にありまして、庭が南側にあつて、その庭に面したところに八畳の間がありました。その八畳間の一番南側、庭に面した側にお袋が布団を敷いてくれて、そこに私は横になっていました。お袋は八畳間の東側の廊下に立って私と何か話をしていました。そこに何かピカーッと光りました。その強烈な光ははっきりと覚えています。その辺が全部真っ白になったくらい強烈な光でした。

よくピカドンと言いますが、私はドンという音は聞いた覚えがありません。家が壊れる音と一緒にわがわからなかったのか、あるいは人間の聴覚の限界を超えていたのか。音は覚えていないのですが、ピカッと光った強烈な光ははっきり覚えています。それから何秒経ったのか、何分経ったのかわかりません。気が付いてみると、八畳間の南側に横になっていたのが反対側の一番奥に夏掛けの布団にくるまって転がっていました。たぶん吹き飛ばされたのだと思います。母は廊下にとっさに伏せたらしいのですが、その上に襦が倒れ掛かって、この襦がガラスを防いでくれました。

家中のガラスは全部割れ、家の中にはガラスが2、3cm積もっていました。天井は吹き上げられて湾曲している。爆風は上から来たはずですが、それが地面に当たって跳ね返って、その爆風で天井が上に持ち上がったのではないかと思います。吹き上げられた天井はあちこち破れて、瓦も吹き飛んで空が見えていました。家の柱も折れているものもあれば、半分折れかかっているものもある、そういう状況になっていました。

私は夏掛けの布団を頭から被ったお陰で大した怪我はしませんでした。ただ右の脛のところ、弁慶の泣き所が抉れて白い骨が中から見えていました。血がだらだら流れている。お袋が「こ

「一ちゃん、足から血が出ているよ」と言いましたが、痛さを感じない。人間、極限状態になると痛いとか痒いとか、そういう感覚はマヒしてしまいます。お袋も頭から血をだらだら流している。だけど痛いとは感じていない。

奥の部屋に父親の母、私の祖母がいました。当時60代後半だったと思います。祖母は一番家の奥にいましたので怪我はせずに助かりました。

それから家には鹿児島から来ていた私の従兄弟、母親の一番下の妹の子どもで5歳の男の子がいました。鹿児島は艦砲射撃でやられるかもしれないので危ない。それで従兄弟を家で預かっていました。広島はそれまで一発の爆弾も落ちなかった。実験のためにとっておいたのでしょうね。そんなこと、こちらはわかりません。B29は頭の上は通るけれど広島には爆弾を落とさない。それで変な錯覚をして、鹿児島は危ないから広島へ疎開をした方がいいと言うんで、一番小さい子を預かったんです。この子は表で遊んでいたのですが、びっくりして家の中に飛び込んできました。大した怪我はしていなかったのですが、この小さな従弟と祖母はこの年の12月に亡くなりました。抵抗力が一番弱かったので、放射線の影響がこの二人に非常に強烈に働いたのではと思います。

(▼⑥竹内勇氏提供)



⑥は爆風を受けた街。家がみんなつぶれちゃっているんなものが飛んできている。そういった状況を描いた絵です。

台風で風速60mくらいあると家はすっ飛んでしまいます。風速30mくらいでもかなり壊れる。原爆の爆風はそんなものではない。その5倍も10倍もあるような強烈な爆風でみんな吹っ飛んでしまいました。

一番厄介なのが強烈な放射線で、この放射線があとからいろいろな影響を及ぼすわけですが、爆風と熱線で広島はあっという間に燃えてしまいました。

私の学校の校舎にいた連中にも、うまく逃げ出したのは2、3人です。あとは助ける暇もなく燃えてしまった。

(▼⑦川本俊雄氏撮影 本川国民学校校庭と思われる死体の火葬場)

川本祥雄氏提供 SA038-1)



広島の街は瞬時にして(⑦のような)廃墟になってしまった。普通の爆弾が落ちても、広島の街は結構大きいですからこうはなりません。広島の街は熱線と爆風で一瞬に吹き飛んでしまって、あっという間に何もなくなっていました。

(▼⑧小林キクエ氏作 相生橋西詰 広島平和記念資料館所蔵 GE17-19)



⑧は、昔は火事になった時に水を掛けるために、コンクリートの水槽に水を溜めていました。熱いから、みんなその中に飛び込んだわけです。そういう絵です。

その時は、まず爆弾が直撃したのかなと思ったんです。それでとりあえず外に出てみようということで外に出たんです。そう

したら周辺の家がみんな同じようになっている。

表に出て近所の人と一体どうしたんだろうと話をしていました。(地図を見ると) 段原中町の少し下に兵器廠というのがあります。これは陸軍の弾薬だとか、鉄砲だとか大砲だとか、そういった武器と火薬を置いておく場所になっていました。これが爆発したかと思いましたが、どうもそうではないらしい。

(▼⑨広島平和記念資料館入り口の蠟人形)



1時間、2時間くらい経ったところに、比治山の向こう側から黒い煙がぼんぼん上がり出しました。

そうこうしているうちに比治山の方から異様な人の群れがぞろぞろ何百人、何千人と連なって歩いてきたのです。

⑨は広島資料館の入口にある蠟人形です。みんな皮がぶら下がっていて、腕を上げています。腕を下げて、腕が身体に触れると痛いのです。あの人形はかわいそうにと思って服を着せたのだと思いますが、実

際は着物は着ていませんでした。夏だからみんな薄着で、シャツ一枚で熱線を浴びていますから、ほとんど何も着ていない状態で、髪の毛もチリチリに焼けていました。頭も顔も真っ黒で何も着ていない、そして人形のように腕を上げた人がゾロゾロ歩いている。

そういう人が比治山の方から我が家の方に向かって、次から次に列をなして逃げてきました。そうして我が家の辺りまで来て、焼けていないので安心したのでしょう。みんなバタバタ倒れてしまう。南側と東側にあった道路はあっという間に怪我人で埋まってしまいました。倒れてすぐに亡くなった人もいれば、痛い、痛いという呻き声、そして人間の皮膚が焼けた強烈な臭

い。これがそこいら中に立ち込めていました。

絵や写真で火傷をした状況や街がなくなってしまった状況はわかるのですが、わからないのが臭いです。その時の臭いは今でも鼻について離れません。とにかく酷い臭いというか、すごい臭いというか、表現のしようがない臭いです。そういう人があつという間に何百人、何千人と道路を埋め尽くしてしまう。

我が家は門があつて、一段高くなつて通路があつて、その先に玄関がありました。その門のところに50歳前後の人が倒れていました。かなり火傷もしていましたから玄関まで引きずり込みました。水が飲みたいと言うので、水道は壊れていましたが、チョロチョロ出ている水を飲ませてあげて、やっとちょっと落ち着きました。「治ったらお礼に来たいから住所と名前を書いてくれ」と言われて、「そんなことをしなくてもいい」と言ったんですが、どうしても言われて住所と名前を紙に書いて握らせました。その人は、それを握りしめて息を引き取りました。まだ13歳の子どもでしたから、目の前で人が死ぬという経験をしたことがなかったわけです。本当に目の前で人が死んでいくという、非常にショッキングなことが起きました。

表の道路ではそういった人が呻き声を上げる、水を欲しがる。だけど「水をやると死ぬから水はやるな」と言っている人もいる。けれども水があればね、本当にあげたいと思った。でも、水もなかなかないわけです。

そうこうしているうちに昼ごろになったら、宇品にいた陸軍の補給部隊の兵隊さんが救援に来ました。この人たちも火傷をしたり怪我をしたりしていました。救援には来たけれど手当のしようがない。薬があるわけでもない。油のようなものを持って来て火傷をしている人に塗っていましたが、気休めでしかありません。我が家にも薬箱の中に赤チンのようなものや消毒薬があったのですが、そんなものは爆風でどこかに吹き飛んでしまって見つからない。本当に手当のしようがありませんでした。

そういう状態の中で次から次に人が死んでいく。死体で道路もふさがっていて歩けない。兵隊さんがそれを塀の方に片付けて真ん中を少し歩けるようにしました。中学生なら手伝えということで、私も手伝わされてね。亡くなった人の頭を兵隊さんが持ち、私が足を持つ。持つと、火傷していますから皮がズルッと剥けて骨を直接掴んでいるような感じですが、13歳の子どもがそんなことをしたら気絶してしまうと思うのですが、先ほど申し上げましたように極限状態になると、恐ろしいとか、気持ち悪いとか、そうした感覚がなくなってしまうのです。正常な感覚では、火傷して亡くなって、触ったら皮がズルッとするような人をととても触ることはできませんよ。そういう作業を2時間くらいやりました。

午後になって、兵隊さんが「ここはもういいから、あなたたちは安全な方へ逃げなさい」と言うので、私の家は爆心地から東へ2kmくらいですけれども、母親と5歳の従弟の手を引いて、さらに2、3km東側の大きな川の近くまで逃げました。父親が出張していましたから、祖母は父が帰って来た時に家に誰もいないと心配するからと家に残りました。

その辺は今では住宅地になっていると思いますが、当時はブドウ畑でした。ブドウ畑は上が

棚になっていますから、棚に新聞紙を敷くと夜露をしのげます。食べるものも飲むものもないけれど、ちょうど夏ですからまだちょっと早いけれどブドウがなっていて、よその家のものですけれどそんなことは言っていられない。そのブドウを食べて飢えと渴きを潤したという記憶があります。

そこへ逃げるまでの道のりも怪我をした人、火傷をした人、亡くなった人、表現は悪いですけども人がいっぱい転がっていました。その人たちを踏まないように避けながら3人で逃げる途中、まだ息のある人が助けてくれと足にしがみつくの。しがみつかれても困るんですよ。何かあげようにも何もない。水が飲みたいと言われても水もない。こちら半泣きで、掴まれている足を振り払って、それで逃げたというのが今でも非常に心の重荷になっています。何とかできなかったのかと思いますけれど、本当に何もできなかったですね。そうやってやっと辿り着いたブドウ畑には大勢の人が逃げて来ていました。

翌日の夕方ぐらいですか、家に帰ったら親父が帰って来ていました。親父は広島がやられたと聞いて山陰から急いで帰って来たようです。途中で汽車が止まり、線路を歩いて帰って来たらしいのですが、そうすると逆に広島から線路を歩いて逃げて来る人がいるわけです。そういう人に僕のことを聞いたら、「広島の中1年生は全滅したよ」と言われて、私は駄目だ、いないものだと思って帰ったら、生きていたのでえらく喜んでくれました。

二人の姉のうち一人は結婚して広島にはおりませんでした。もう一人の姉は広島女子専門学校、今は広島女子短期大学になっていますが、その学生で、学校ごと瀬戸内海の島に連れて行かれて、軍需工場の作業をやらされていました。その姉は直爆はしなかったのですが、爆心地を通過して家まで帰って来ましたから入市被爆しています。

そういうことで私の家族は全員無事だったわけですが、このことは当時は非常に言い難かったですね。「お宅はどうでした」と聞かれて、「うちはお陰様でみんな助かりました」とはとても言えなかった。誰か家族が亡くなっている人が多かったから言葉を濁すような感じでした。

私の戦前からの友人知人というのもみんな、学校へ行ったり疎開作業に行ったりして亡くなりました。特にその中で私の心の中に深く残っているのは、一人は昭和8年生まれだけれど早生まれで学年が一緒の小柄な男の子で、僕を慕ってくれていた子がいたんです。この子も行方不明でとうとう帰って来ませんでした。2、3ヵ月経ってから、母親からお見舞いに行ってくれなさいと言われてました。行けばその子の母親に泣かれるに決まっているから嫌だと言ったのですが、どうしても行ってくれと言う。それなら一緒に行ってくれと言ったら、一人で行けと言うのです。しょうがない、一人で行ったら玄関を開けた途端に抱き着かれて、泣かれて、泣かれて。私も一緒になって泣いていました。

私は近所の公立学校に行っていた子とは学校は違うんですが、それでも日ごろ近所で仲良く遊んでいる子がいました。その中の一人とは特に仲が良過ぎて毎日喧嘩してしましてね。遊んでいて夕方になると行き違いが起きて、お前なんかと二度と口なんかきくものかって殴り合いの喧嘩をして別れる。翌日は学校から帰って来ると、ケロッとしてまた遊ぶ。その繰り返しを

していたのが、喧嘩別れをして、翌日仲直りをする前に原爆が落とされた。だからその子とは未だに仲直りができていない。そういう辛い思い出があります。

先ほどお話しした祖母と従弟ですが、当時は広島に落とされたのが原爆だということは全く知りませんでした。これが原爆だと分かったのはだいぶあとのことだと思います。当時は新型爆弾と呼ばれていました。この新型爆弾が放射線を出すということは、当時はわかりません。だから水があれば平気で飲んだし、食べるものもないから家の庭や宇品線の線路の脇を耕して作ったカボチャやジャガイモを平気で食べていました。爆心から2 kmくらいのところですから、どれだけ放射能があったかわかりません。今だったらそんなことはできませんよ。私たちは直接被爆をして放射線を浴びた上に、放射線を浴びたものを食べて内部被ばくもしていると思います。

ただ、放射線に対する抵抗力というのは人によってかなり違うみたいです。私の会の副会長をやっている佐野博敏さんという元都立大学の総長をしていた方がおられます。この方に言わせると、戦場で弾が雨あられと飛んできて、隣の人は弾に当たって死んだけれど自分は助かったという人がいる。それと同じで放射線も当たった人と外れた人がいる。当たった人でも、抵抗力が強い人もいれば弱い人もいる。

祖母は67、8歳でした。今の67、8歳は若いですが、当時は今で言う90歳前後という感じで、抵抗力が弱かったのだと思います。5歳の従弟も小さくて抵抗力がなかったところに家の外にいましたから、家の中にいるのに比べたら余計に放射線を浴びたのだと思います。

家では、一番抵抗力の弱い祖母と従弟が亡くなりました。9月ごろになって父親が「元気なうちに鹿児島に帰そう」と言うので、当時は列車に乗るのも大変でしたけれども父、親は鉄道省、今のJRに勤めていましたので連れて帰ったのですが、12月の中ごろに亡くなりました。

私もたまたま助かりましたけれども、父親がいればたぶん学校に行かされていたと思います。学校に行っていたら私はたぶん駄目だったと思いますし、母は私が学校に行っていたら出掛ける予定でいたそうです。父も勤め先が八丁堀にありましたから。父親が出張だったために父親も助かり、私も助かり、母親も助かった。ほんの偶然、紙一重でしたけれど。うちは直爆で死んだものはおりませんでした。祖母と従弟が相次いで亡くなりました。

私も髪の毛は全部抜けましたし、歯茎から血が出て、歯を磨くことができない。それから怪我をしますと治らない。ちょっとガラスが刺さって怪我をしたところが3ヵ月くらい治りませんでした。そこが真夏の暑い時ですから膿むわけです。そうするとハエがたくさんいるから、そこに卵を産んでウジがわく。生きている人間の腕の傷の上をウジが這い回っている。自分でそれを取って捨てるという状態でした。ましてや亡くなった人は2、3日でどんどん腐っていきますからウジだらけになってしまう。そういう悲惨な状況でした。

それから人間の尊厳どころではなかったのは、亡くなった人を近所にあった学校に兵隊さんが運んで、一人ひとり火葬することができないので、何人かをまとめて油を掛けて燃やしてし

まう。どこの誰かもわからない、大人か子どもかもわからない、男性か女性かもわからない、とにかくごちゃ混ぜにして焼いてしまう。今では考えられないことです。やった兵隊さんも大変だったと思いますけれど、人間の尊厳はどこにいったのだというような扱いをせざるを得なかった。たまたま身元が判かった人も、火葬場も何もありませんから河原で、そこいら辺に転がっている木を組んで、その上に載せて自分たちで焼く。そうやって家族知人に見送られた人はまだ幸せ。幸せという言い方は変ですが、まだ幸せだった。直爆で亡くなり行方不明という方がたくさんいます。

⑩は火傷をした人。⑪が逃げている人の様子。⑫が火傷をして皮がぶら下がっている様子。⑬⑭は逃げている人たちの様子。こうやってみんなゾロゾロと逃げているわけです。

(▼⑩尾棟政美氏撮影 1945年8月 (▼⑪高柴暖枝氏作 三篠橋  
似島検疫所 広島平和記念資料館提供 広島平和記念資料館所蔵  
SA002-1) GE46-32)

(▼⑫松室一雄氏作  
平和記念資料館所蔵  
GE-03-40)



(▼⑬山下正人氏作 安芸郡府中町  
広島平和記念資料館所蔵  
GE07-06)

(▼⑭岡崎秀彦氏作 比治山公園中腹  
広島平和記念資料館所蔵  
GE06-16)



⑮は私が小学校で証言をしているところ。⑯は都庁で原爆展をしますので、そこで小学生に話をしているところです。⑰は夢の島から広島までの平和大行進が5月に歩き始めますが、ちょうど銀座を行進しているところです。⑱の「われら生命持てここに証す 原爆許すまじ」、これは東友会の合言葉になっています。

(▼⑮小学校で証言する大岩さん)



(▼⑯東京都庁での原爆展の様子)



(▼⑰平和行進で先頭を歩く被爆者)

(▼⑱東友会のシンボル)



逃げる途中、みんな熱い。火傷して体中が熱いですから、地図でおわかりのように広島には川がたくさんあるんで、みんな川に飛び込んだんです。ですから死体の川になってしまった。元安橋というのが産業奨励館のすぐ近くにありますが、これを産業奨励館のすぐ下に移そうという動きがあり、とんでもない話だということで反対をしています。この対岸では毎年8月6日に灯籠流しをしています。この川では大勢の人が焼け死んだ。ここは牡蠣を食べながら酒を飲んで歌う場所ではないということです。

原爆というのは落とされたその瞬間から非常な惨状を呈しましたし、亡くなった人たちは人間として死ぬことすらできませんでした。昭和20年の12月までに広島で14万人、長崎で7万人、合計21万人が亡くなりました。それよりもはるかに威力の大きい核兵器が今1万6千発も存在しています。それこそ地球が10回くらいなくなってもまだ余るくらいの核兵器が

あるわけです。この悪魔の兵器は人類とは共存できない、これはなくさなくてはならない。この前もウクライナを巡ってロシアのプーチン大統領は核兵器を使う準備をさせたと言いましたが、とんでもないことです。今はあちこちの国が持っています。どこかの国が使えば、あっという間に世界は火の海です。核兵器だけは一刻も早くなくしてしまいたい。今年、NPT再検討会議が開催されますが、それが実現する方向に向いてもらいたいと思っています。核兵器を持たない国はみんな核兵器廃絶に賛成しているけれど、持っている国が賛成しないとどうにもなりません。持っている国は核兵器廃絶には積極的ではない。日本政府も真っ先に先頭に立たなくてはいけないところがアメリカの核の傘の下にいる。

戦前の日本は10年に1回戦争をしていました。今でも戦争はあちこちで起きています。日本が70年戦争をしなかったのは憲法9条があったからです。今、憲法の解釈を変えて集団的自衛権を行使しよう、その関連法案をどんどんつくろうとしています。せっかく日本が70年間戦争をしなかった、この歴史があっという間に崩れてしまう。

被爆70年の今年、被爆者の数は19万人を切ったと思います。東京も6千人ちょっとくらい。とにかく高齢化していますから、急速に亡くなっていく数は増えていくと思います。東京では被爆者と被爆2世の数が逆転しています。被爆者の数は減って直接話をできる人はいなくなります。こうして話したものを撮ってDVDその他に残す、あるいは自分のものとして語り手として話をしてもらい、これがないと70年平和を保ってきた日本がそうではない国になってしまう。皆さん方、その次の世代、そのもう一つ下の世代ぐらいに、今の日本が進もうとしている変な道を行ってしまうと、また戦場に行くはめになるかもしれない。我々の問題というより、むしろ若い皆さん方の世代の問題なのです。原爆というのは70年前の昔話ではなくて、これから未来へ向かっての問題です。この先、さらに恐ろしい兵器ができるかもしれない。そういったものを皆さん方が阻止していかないと、皆さん方の子や孫の世代になった時に、我々のもうちょっと上の世代が無理やり戦場に駆り出されたようなことが、また起きないとは限らない。アメリカの兵隊は今もよその国の戦争に行つて命を落としている。集団的自衛権が行使されればそうになってしまう。今日参加している方の中には大学生の方もいらっしゃるから、これからしっかり我々の話を語り継いでいただく、また、それを基にしてそういう国にならないような努力をしていただきたいと思います。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？
--

1. 可	2. 不可
------	-------

**【聞き取りをおこなった方の記入欄】**

聞き取り日時	2015年3月29日(日)13:30～15.50	場所	プラザエフ5F会議室
聞き取りをされたのは	1. 個人 2. グループ〔名称:ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク「被爆の証言を聞くつどい」受け継ぎ手 8名〕		
聞き取り票記入者	島村 雅人	TEL/メール	03-5216-7757
連絡先	〒102-0085 東京都千代田区六番町15 主婦会館プラザエフ		
住所等	ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会		

**4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。**

司会：これからディスカッションに移りたいと思います。今、お話を聞いて心に残ったことや自分が伝えていきたいと思ったこと、もっと聞きたかった部分があればお願いします。

○：被爆した時に水を飲むと死ぬと言われていますが、どうしてそうなるのですか？

大岩：火傷をしたり、怪我をした人に水を飲ませると亡くなるということは、よく言われています。医学的に根拠があることなのかどうかはよくわかりません。我々もそう言われました。でもね、どう見てもこの人は助かりそうにないという人が水を欲しがっているのならば、末期の水ではないですけど飲ませてあげたいと思いましたよ。ただ、その水がない。水道も壊れてしまっていましたから。たまたま水道からちょろちょろと水が出ていたので、一部の人には……でも、もう飲む力もないですから口に含ませたという感じでした。だから水を飲ませたからあの人は死んだということではないと思います。

○：水を飲ませてはいけないということはすぐに伝わってきたのですか。

大岩：そうですね。誰かが根拠があって言ったのか、当時の大人がそう思い込んでいたのか、医学的にどうなのかはわかりませんが、当時の大人はそう言っていました。

○：当時は極限状態で、いろいろな感情が出てこなかったとお話しされていたと思うのですが、自分が置かれている現状や周りの様子に目を向けられるようになったのはいつごろでしたか。また、その時に湧き上がってきた感情は悲しみももちろんあると思いますし、怒りとか、そういったものもあるのではないかと思います、どのようなものでしたか。

大岩：私も体調を崩して歯茎から出血したり、熱が出たりしていましたので。原爆が落ちた時の悲惨な状況というのはしっかりと覚えているのですが、その後の状況がある一定の時期、ぽっかり穴が開いたように抜けています。家は焼け残りましたがかなり壊れました。それを誰が修理をして住めるようにしてくれたのか、学校にいつから行きはじめたのか、その辺がはっきりしません。1年生の時は学校に行って勉強をしていたという記憶がほとんどありませんから、2年生になって、原爆が落ちて半年以上経って、やっと少し落ち着いてきたのだと思います。

それと私は陸軍付属の幼稚園、小学校に行っていましたから、自分の進むコースは決まっていた。陸軍幼年学校は旧制中学に当たりますが、小学校から直接は受験できません。一旦中学に入って、1、2年生で受験することができる。私は中学に入って6月に幼年学校の試験に合格して、9月1日が入学式の予定でした。陸軍幼年学校を卒業後は陸軍士官学校というのがあって、これは旧制の高等学校に当たります。陸軍士官学校は旧制中学の4、5年生から受験できました。海軍には幼年学校的なものではなくて、旧制中学の4、5年になってはじめて海軍兵学校が受験できた。海軍兵学校は広島江田島にありました。今は自衛隊の士官を養成する学校があります。陸軍は幼年学校から士官学校に上がっていくのが当時のエリートコースでした。

私はさらにその予備校的な陸軍付属の小学校にいましたので、とにかく自分の将来は陸軍の将校になるのが当たり前のコースだと思っていました。それが突然、原爆が落ちる、戦争に負ける、学校はなくなるということでしたから、幼年学校に行くということがまず消えたわけです。そのあと旧制中学から旧制高等学校へは、東京に一高があって私が行った岡山は六高ですけども、ナンバースクールというのがありました。通常のエリートコースに進む人はナンバースクールに行きました。ナンバースクールに入れば、どこかの帝大には間違いなく入れる。

私はちょうど学制改革の時期で、旧制中学の3年を卒業して4年生になるときに新制高校という制度に変わり、旧制中学の4年になるはずが新制高校の1年生になりました。私の場合は旧制広島一中の4年になるはずが、新製の鯉城高校の1年生になった。学校の名前は変わっただけで中身は変わらない。

2年生になる時に再編成というのがあって、これで男女共学になった。広島の場合はこの時に中学校、女学校を本当にごちゃ混ぜにしてしまった。そして自分の住んでいるところに近い高校に行くことになった。地図を見ていただくと宇品線の下の方に被服廠というのがあります。ここに広島の第一県女が入ったんです。第一県女は女学校では超エリート校でしたけれど、ここが皆実高校に変わって、私の広島一中は鯉城高校からさらに国泰寺高校に名前が変わりました。私は家が段原中町でしたから、お前は国泰寺高校ではなく皆実高校に行けということになりました。

そういう学制改革があって、軍人になる予定が、素地がなくなって。ナンバースクールに行く予定がそれもなくなって、旧制六高に行つたつもりが新制岡山大学になったという変な時代を通過してきたんです。本来でしたら幼稚園小学校から幼年学校を出て陸士へ。陸士を出て少尉になって、大尉になったら陸大に行つて卒業すると少佐になる。少佐は今の財務省の本庁の課

長クラスです。そういう一本の筋であったはずが、なくなってしまったわけですから、本当に呆然としている間に時間が過ぎてしまったという感じです。これは人によって感覚が違うと思いますよ。

一番気の毒だったと思うのは原爆孤児になった人たちです。親兄弟みんな原爆で亡くしてしまっただけで、当時、小学校は学校ごとに強制疎開というのがありましてね、学校ごと田舎に疎開してました。ですから子どもだけは助かって、戦争が終わって帰って来たら広島は焼け野原で何もありません。自分の家も跡形もない。親もどこに行ったかわからない。兄弟もいない。そういう原爆孤児がたくさんいました。この人たちは生きるすべがない。人のものでも何でも盗って食べないと死んでしまいますから、言ってみれば悪いことばかりしていたわけです。だから原爆孤児はどうにもならないとみんなから迫害された。今は大きな災害があると世界から援助がありますけれど当時はそんなことはできないし、国にも力がない。みんな何らかの被害を受けていますから自分のことで精一杯で人のことまで手が回らない。原爆孤児に自分の握り飯一つ盗られたら大変です。本当は保護されなくてはいけない小さな子どもがえらく迫害されたわけです。この子たちが一番かわいそうだったと思います。そういう子どもたちを似島の似島学園というところに収容していましたが、かなり厳しい生活だったようです。原爆孤児になった人は大勢いると思いますが、そういう人は話をしません。

私も話を始めたのは被爆者の会に入ってからでした。会社にいたときは自分から積極的に話したことは全くなくて。20年～25年くらい経った時、私が課長だったころに神戸の支店長で会社の先輩だった人から、「お前、広島で被爆したんだってなあ」と言われて話をしたのが初めてでした。それまでは全く話をしませんでした。話をすると当時の光景が目の前に浮かぶんです。辛い思い出ですから。身内に直接その場で亡くなった人はいなくても、親しかった友人知人は全部いなくなったわけですからね。

人によっていろいろな境遇に置かれたと思います。私の場合は家も焼け残ったし、両親も健在でしたから他の人に比べるとまともな生活ができたと思います。2年生からはしっかり学校にも行きましたから。

○：たまたま新聞で知ったのですが、浅草が空襲で焼けた時に自分の上に何人も覆い被さって上の方は焼けて亡くなったけれど、自分はその下で助かった。でも家も焼け全部なくなって、その人も孤児になってしまった。そうしたら孤児狩りというのがあって、牢屋のようなどころに入れられて、そのあと親類をたらい回しにされて、やはり迫害されたということが書かれていました。原爆孤児も空襲孤児も同じように辛い思いをしていたのだと思いました。

大岩：その孤児狩りにあって収容されたところが似島学園だったのです。とにかく表に出したら悪いことをしますから。でも悪いことをしないと生きていけない。子どもですから仕事ができるわけじゃない、誰も助けてはくれない。自分で何とかしなくてはならないとしたら盗むしかない。

今は社会制度が整備されてきましたけれど、当時は日本中がやられていますから余裕がなか

ったと言えはそれまでですけど、一番保護されなくてはいけない人たちが迫害されてしまったんです。今の社会でも子どもが一人で放り出されたら生きていくのは大変ですよ。ましてや何もないところに放り出されたらどうにもならないですよ。

原爆孤児だった人たちは疎開して被爆していませんから、その人たちは被爆者手帳も持っていません。その後、入市して、誰かがそれを証明してくれて被爆者手帳をもらえた人はまだいい。

○：証人がいないということですか。

大岩：証人もいない。周辺の人みんな亡くなっていますから。

○：東友会に入って初めてお話しされたということですけど、それまでは話さなかったんですか、それとも話す機会がなかったということですか。

大岩：最初の20年～30年はあえて話さなかったですね。自分の気持ちの中から消してしまいたいという思いの方が強かった。それでたぶん被爆後のいろんな状況で、強烈な印象として残ったことは別として、そうじゃないことは記憶から消えてしまったのだと思います。家も誰かが直してくれて住めるようになったのかということも未だにわからない。親父に聞いておけばよかったと思いました。それだけ自分の記憶の中からその部分を消してしまいたいという思いが強かったのでしょうかね。

○：3. 11の時、津波で流された後の様子が原爆荒野とそっくりで、それまでは何事もなかったと思っていた人がフラッシュバックに見舞われて、暗闇をすごく恐れるようになったりして、それで亡くなられたという話をお聞きしました。フラッシュバックの体験というのは大岩さんはありますか。

大岩：津波で流された映像がテレビで流れた時は私も身震いしました。これは広島焼け跡と同じじゃないかと。松の木が一本残りましたよね。あとは何もなくなった。僕はお袋が行っちゃ駄目だと言うのを、地図に広島駅からの市電がぐっと曲がっているところがありますね、その辺りまで出てみたんです。そうしたら広島駅から己斐、横川の辺りまでが全部見渡せるんですよ。当時は今と違いますが、それでもビルや家が立ち並んでいてそんなところまでは見えなかった。それでびっくりして家に帰りました。その光景と同じでした。ですからあの津波の映像を見て身震いしました。忘れていた人が、あれを見て思い出してという気持ちはよくわかります。

未だに被爆者だということを家族にも誰にも言っていない人が結構います。僕の知り合いの中にも一人いて、そのお宅に行く時は被爆者の話は全くしない。東友会とか、三鷹は三友会とか、何でそんな変な名前を付けているかと言うと、三鷹市原爆被害者の会という封筒で送ると、この家は被爆者だとわかってしまう。そういう人からすれば被爆者の会の名前で郵便物や電話

が来るということはえらく迷惑な話なんです。あえて手帳を取ってないという人もいます。

私も思い出したくないことを思い出して、書いたり、話したりしたくなかった。しかし被爆者の数がどんどん減ってきて、世の中の空気や情勢が変わってきている。そうすると今のうちに伝えておかないと、そうした記憶がなくなってしまうと人間は何を考え出すかわかりません。現実にはこういうことが起きたんだということを、正確にしっかり伝えなくてはならないと思って話を始めました。小学校の低学年にはなかなか理解し難いでしょうけれども、5年生、6年生なら理解してくれます。

話に行った時には、まず「今日は朝ごはんを食べてきた？」と聞きます。そうするとみんな、「はい」と手を上げます。「帰ったらおやつがある？」と聞くと、みんな手を上げます。「私たちのころは朝ごはんを食べている人は少なく、お芋一つ食べて来られればいいくらいで、みんなお腹ペコペコだったんだよ」と言うと、「何で」と聞かれます。「食べ物がなかったんだよ」と言うと「何でなかったの」って。そこで「今でも日本は貿易をしてあちこちの国から品物を買っているから十分にあるんだよ。日本が孤立したらガソリンもない、ゴムもない、食べるものもなくなってしまう。食料の自給率だって50%ない。世界から孤立したら半分は飢えなくてはならない」ということを言わないと今の子どもは全くわからない。それが現実です。

あるのが当たり前という生活を続けていくためには日本が平和でないと。戦争が始まって日本がまた孤立状態になったら、それこそガソリンの一滴も来なくなります。松根油って知っていますか。油がなくなったので、それを補うために松脂の油を集めたんです。そこまでいったんです。昔は芋飴と言っていましたが、でんぷんに糖分を足して飴玉を作ったんでしょうね。それを一つ、二つもらって、亡くなった従弟にあげたらえらく喜んでいましたが、今の子どもは見向きもしないでしょうね。そういう生活になるという話から始めないと、いきなり原爆の被害の話をして全然ピンと来ないですよ。

今の政治家もそういう生活はほとんどの人が知らない。昔は大東亜共栄圏でアジア諸国を日本の傘下に収めてということを考えて時期がありました。外国をやっつけて日本の平和を守ろうという感覚は、これはえらい間違いだと思います。積極的平和主義というに私は賛成しかねます。

本当の平和というのは空気のようなもので、ある学校で話をした時に「平和って何ですか」と真面目に質問されましたね。生まれた時から平和ですから、「平和」と言われてもピンと来ないわけです。

○：陸軍のエリートを目指している時に8月15日を迎えられて、どう受け止められましたか。

大岩：8月15日が終戦だったと僕が知ったのは一週間ぐらい後です。通信手段が全くなかったわけです。ラジオも聞こえないし新聞も出ないですから。人伝に母親が聞いてきて、「ああ、そうなの」という感じでした。本来でしたら日本は神の国で負けるはずがない、負けそうになったら神風が吹くと言われて、それを信じていたわけですから、そんな馬鹿なことがある

かとなるはずですが、あれだけコテンパンにやられ自分の身体も弱ってという時期でしたから。

○：価値観が逆転するわけですからすごくショックだったと思っていたんですが。

大岩：終戦になって我に返ったころには、ああそうだなという感じだったと思います。敵兵が落下傘で降りて来たところを竹槍で下から突けという訓練をいていたわけですが、アメリカ兵は素手で降りて来るわけではない。機関銃で下にいる人を撃ちながら降りて来るわけで、それを下から竹槍で突けるわけがない。そういう訓練をやらせた方もやらせた方だと思います。我々は子どもだから真面目に、降りてき来たら下から突かなくてはいけないと訓練をしていたわけです。あとから考えてみれば馬鹿馬鹿しいことですがけれど、それを本気でやっていたわけですから。

○：エノラゲイの機長だったポール・ティベッツは「自分は英雄だ」と死ぬまで言っていました。副操縦士だったロバート・ルイスは「我々は何ということをしてしまったのだ」と後悔して死んでいったと言われています。二人はヒロシマを違う方向から見つめていました。このことをどう思われますか。

大岩：ポール・ティベッツはそう思わざるを得なかったでしょうね。戦争では人をたくさん殺すことが名誉なことで、今でもアメリカでは原爆を投下したお陰で戦争は終わったし、それで何百万人が死ななくて済んだという教え方をしているわけです。僕は前にコロンビア大学の付属のコロンビア・グラマースクールという高校で話をした時に、一人の男の子が泣きながら廊下に出て行きました。しばらくして帰って来て、今まで僕が教わってきたことと全く違う、アメリカは何と酷いことをしたのだろう、そんなことをしたとは全く知らなかったと泣いていました。人間の気持ちで考えればその男の子の気持ちが当たり前だと思うんです。だけど、そういう教えられ方をしていない。

最初に私は教育ほど恐ろしいものはないと言ったんですが、私も幼稚園の4、5歳の時からそういう教育を受けていますから、それが当たり前になっているわけです、殺せば殺すほど英雄になると。エノラゲイの機長が本気で死ぬまで自分を英雄だと思い込んで死んだのか、自分は英雄だと思わざるを得ないで、自分は英雄だと自分に言い聞かせて死んだのか、それはわかりません。自分がやったことは正しい、命令でやったのだから自分のせいではない、戦争では人を殺せば殺すほど英雄になるのだから何が悪いのか、ということでしょうね。

司会：貴重なお話をありがとうございました。被爆した当時の広島の様子もそうですけれど、そこにあった背景ですとか、原爆孤児のことも私は今まで詳しく知らなくて、そういうこともこれから大事にしていかななくてはいけないということを今日は強く感じました。ありがとうございました。最後に大岩さんから私たち若い世代に一言いただければと思います。お願いします。

大岩：「戦争ってなんですか？一言で言ったらどういうことですか？」とよく聞かれます。その時に私は、「戦争は人も国も、全てを狂気にする」と答えています。まともな感覚では戦争はできません。人が人を殺すのですから。一人を殺せば殺人罪です。それが戦争では一人が100人殺せば英雄なんです。そんな馬鹿なことはない。若い人はぜひ、そのことを実感として持っていただきたい。その感覚に吞まれてしまうとそれが当たり前になってしまいます。職業軍人はどうやって人を殺すか、どうやってたくさんの人を殺すかという訓練を受ける。職業軍人にとってはそれが当たり前のことなんです。人も国も狂ってしまう、それが戦争なんです。

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

電話/FAX03-5216-7757 Email: hironaga8689@gmail.com